文化

沈黙に向き合う

沖縄戦 聞き取り47年 〈14〉

石原 昌家

伊是名島虐殺事件 ⑥

中野学校出、戦後も諜報？

聞き取り直前に沖縄去る

伊是名島虐殺事件に関わっていたのが、陸軍中野学校出身者と国頭からクリ舟で島にたどり着いた日本軍将兵からなる敗残兵グループ7人だ。

彼らは島に漂着した米兵3人の殺害や奄美の少年3人、家畜商のチナースーをスパイ視や非国民扱いし、主導的に関与して殺害した。

前回、伊是名島出身の仲田昌浩さんの証言で、「特務教員」として島に赴任した県外出身で陸軍中野学校出身の宮城太郎（偽名）が「日本復帰」後、琉球大学教授として再び沖縄で暮らしていたことを紹介した。

仲田昌浩さんが証言したように、宮城太郎は那覇市の首里で住居を転々と移し「CIA（米中央情報局）関係者」とおぼしき外国人が出入りしていた。

琉大で教員監視

宮城太郎の動向については当時、琉大教員の間でも話題になっていた。1972年前後、自衛隊の沖縄配備の反対運動が高まる中、琉大でも自衛官の入学を巡って大紛糾していた。そのとき、教授会で宮城太郎教授が監視するかのように各教員の発言をチェックしていて「ただならぬ雰囲気だった」という。

諜報活動に関わっていたとみられるもう一人は、敗残兵グループの隊長格だった平山大尉だ。日本人ではなく朝鮮半島出身者で、英語も操り、島に滞在して1カ月で伊是名方言による琉歌も作詞したという。頭脳明晰で、語学の天才だったというのが島の人々の評判だ。

平山大尉は戦後、韓国に帰国し、韓国政府の要職に就いたようだ。戦後も彼と付き合いのあった島人の証言だ。

2人が戦後、謀略的な動きをしていることをにおわせる情報が別の関係者からも寄せられた。軍事評論家の藤井治夫氏が私の著作「虐殺の島」を読んで訪ねてきたのだ。

藤井氏はKCIA（大韓民国中央情報部）など、韓国情報機関の研究をしていた。著書に「日米韓軍事関係の十五年」（1980年）などがある。

藤井氏はKCIAを研究していくうちに、平山大尉に突き当たったという。さらに平山大尉の動向を追跡していたら、宮城太郎との接点が浮かんだ。このため宮城太郎の現在の活動を調査するため、私のもとを訪れたのだ。

そのころ、「沖縄県史」執筆グループの安仁屋政昭さんらが中心となり、琉大教授だった宮城太郎に、戦時中の伊是名島虐殺事件などについて聞き取りをするための準備に取り掛かっていた。

ところが調査で接触しようとした1975年3月、宮城太郎は突然琉球大学を辞して、沖縄を去ってしまった。インタビューは不発に終わったのである。

私は藤井氏の話を聞いて、伊是名島にいた陸軍中野学校出身者が諜報活動に従事しているかもしれないと思った。このまま彼らの足跡をたどり続けると、私の調査研究である沖縄戦の領域外に踏み込むことになると感じた。このため私は事件後については深入りしないことを決めた。

ところが数年後、陸軍中野学校出身者が伊是名島とは別の離島で、米軍政下の住民を監視する活動に従事していたことを知った。偶然にも本人から直接聞き取りすることができた。この件は別の回であらためて触れることにしたい。

苦しみ続けた遺族

スパイ視、非国民扱いされて虐殺された少年3人は戦前、奄美大島から伊是名島に身売りされてきた。私はその遺族の消息についてはつかめていない。

うち「オーサカー」と呼ばれていた17歳の前里覃吉という少年を雇っていた男性から直接聞き取りをすることができた。男性は戦後間もなく、少年の死を両親に報告するため、沖縄から奄美大島へと「密航」した。しかし両親は大阪で暮らしていたため、親類にしか会えなかった。

男性は1953年ごろ、娘が病にかかったので、ユタのところに行った。するとユタから「娘の病気は奄美の少年が成仏していないからだ」と告げられたという。

このため男性は伊是名島で少年の遺骨を必死に探し始めた。しかし誰に尋ねても少年の遺体を埋めた場所を教えてくれない。埋葬場所だとうわさになっていた海岸を自力で掘り起こしたものの、遺骨を発見することはできなかった。

このため付近の枯れ木を燃やし、その灰を「遺灰」代わりにした。ユタにウガン（御願）をさせ、少年の魂として「遺灰」を持参して再び奄美を訪れた。この時、大阪から奄美に引き揚げていた両親に会うことができ「遺灰」を引き渡している。男性は両親に「私が雇って、伊是名島に連れて行ったために、日本兵に殺されてしまった。申し訳ない」と報告してわびた。

2人目の少年は泳ぎが達者だった14歳の「一郎少年」だ。彼が殺害された理由は、既に米軍が占領下に置いていた隣の伊平屋島に泳いで渡り、伊是名島に日本兵が潜んでいることを密告しようとした、との疑いを掛けられたからだ。

「一郎少年」は日ごろから雇い主や島の人たちから非常に抑圧されていた。その状況を周囲に反感として漏らしていた。このため復讐するために密告をするのではないかと島の人は疑いの目で見ていたようだ。

ある日「一郎少年」が伊是名島から北西約2キロ先にある無人島の具志川島に向け、泳ぎ出したのを住民が見つけたようだ。そこから伊平屋島へと泳いで渡るのではないかと疑われた。

このため防衛隊員だった漁民たちがサバニを出し、具志川島へと渡った。そこで「一郎少年」を捕捉して伊是名島に引き戻したのだ。子どもが口にした不平不満が口伝えに針小棒大に語られ、それが米軍への密告というスパイ活動に及ぶと疑われた。まさに「戦争が正気を失わせた社会」が島を覆っていた。

3人目の少年は12歳ぐらいで「ツネオ」と呼ばれていた。事件を記録した仲田精昌さんは著書「島の風景」で「たえず怯えていて人の顔もまともに見たこともない、ものを言うのをだれも聞いたことがない」と記している。

「オーサカー」と呼ばれた前里覃吉、泳ぎの達者な「一郎少年」、おびえていた無口な「ツネオ」の3少年がスパイ視、非国民という同罪を掛けられて斬首された。それが奄美3少年の虐殺の真相だ。

1980年代、私は「糸満漁民の足跡」の聞き取り調査で、南西諸島一帯の島々を回っていた。その時、奄美大島の名瀬市の漁港で偶然にも伊是名島に「身売り」の少年をあっせんした人物に会うことができた。その男性に聞き取りをすると、自身があっせんした少年が伊是名島で日本兵に殺害されたというのだ。

殺害された少年の父親は戦後、時折酔っぱらっては男性の家に怒鳴り込んで「俺の息子を返せ」と訴えていたという。その都度、男性は父親に1升瓶の酒を持たせ、帰ってもらったそうだ。事件によって、殺された少年の遺族は長い間、深い悲しみと苦しみの中に置かれ続けた。

（沖縄国際大学名誉教授）

（次回は4月12日掲載）